教職課程センター紀要　第2号　139－148ページ，2017年12月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No.2 137-148, Dec. 2017

論　　文

英語の述詞関係節と先行詞名詞句の（不）定性について

On Predicative Relative Clauses in English and the (In)definiteness of their Antecedent Noun Phrases

渡辺　良彦

Yoshihiko WATANABE

Key words：内包的述語，意味タイプ，個体概念，名詞化された属性（種），タイプ転換

1．はじめに*

伝統文法の時代以来，英語の関係節は制限節と非制限節の2つに大別されてきた。本稿で取り上げる「述詞関係節（predicative relative clause; PRC）」構文とは，叙述の（predicational）beの述詞（predicative）（=述語名詞（predicate nominal））を空所とする関係節を含んだ関係節構文（具体例は(1)(2)の名詞句（本稿ではDP分析を採用））を指す。この述詞関係節もこれまで制限節として分類されてきた。しかし，近年，関係節の細分化研究（「細分化」とは，構造と意味の対応をよりきめ細かく述べる規則を立てること）が進むにつれ（cf. 長原（1990），河野（2012）），これまで制限節とされてきたものの中に，実はそれとは全く性質の異なるタイプの関係節が存在することがいろいろと指摘されている。たとえば，Carlson（1977）の「量的関係節（amount relative）」，McCawley（1981）の「疑似関係節（pseudo-relative）」，長原（1990）の「補部の関係節（complement relative）」，河野（2012）の「範囲指定の関係節」などである。さらに，制限節とされるものの中にも「非制限的な制限節」の存在を主張する研究もある（河野（2012）参照）。本稿の述詞関係節（cf. (1)(2)）に関しては，長原（1990）では「補部」として機能する関係節であると主張されている。ただし，(2)の不定先行詞の述詞関係節に関しては慎重で，具体的な議論には至っていない。[1)]

(1)　John is not [the doctor [his father was_]].

(2)　Harry is basically a fat man searching for [a thin man [that he once used to be_]].

（Huddleston and Pullum（2002: 1045））

(1)(2)の述詞関係節の補部としての意味機能については本稿では扱わず，以下では，先行詞名詞句の定・不定の問題と内包性（あるいは個体概念）との関係について議論する。

定先行詞述詞関係節(1)と，不定先行詞述詞関係節(2)および非文である(3)の不定先行詞の例とを比較してみると，(1)と(2)の相違を含めていくつか興味深い事実が浮かび上がる。

(3)*Mary kissed [a thin man [that her husband Harry once used to be_]].

まず，(1)の定先行詞述詞関係節では，定名詞句（以下，関係節を含めてこう呼ぶ）全体もbeの述詞として生じるのが通常であるが，(2)の不定名詞句全体はsearch forの項（argument）の位置に生じている。第2に，この不定名詞句はsearch forのような述語の項としては文法的であるが，(3)にあるようにkissの目的語項として生じることはできない。第3に，(2)の不定名詞句は項であるので，関係節の空所の要素も項としての先行詞（主要部）と同じ「意味タイプ（semantic type）」のものであることが予測されるが，実際には関係節の空所は述詞であるので，このままでは不定先行詞と関係節との意味の「合成」がどのように行われるのかが問題となる（両者の統語範疇の違いについては，本稿では触れない）。この点は，(1)の定先行詞の述詞関係節との大きな相違であ

る。(1)では関係節を含んだ定名詞句全体もbeの述詞となっているのであるから，先行詞と空所の意味タイプは一致する。したがって，関係節の空所に課される同一性の条件をも満足している。[2] 第4に，後述するように，(2)の不定名詞句は，(1)の定先行詞の場合と異なり，それ自体はbeの述詞としては生じにくいということがある。最後に，不定述詞関係節については，その存在が定先行詞の場合に比べて極めて「まれ」であることがHuddleston and Pullum (2002: 1045) で指摘されている。不定述詞関係節は，定先行詞の場合に比べていくぶん文法の「周辺部」に属する構文ということかもしれない。

本稿の構成は以下のとおりである。第2節では，述詞関係節の先行詞の定性に関する先行研究としてHawkins (1980) の分析を取り上げ，その問題点を指摘する。第3節では不定名詞句の分布に目を向け，(2)と比較して(3)が非文法的である理由の説明には「内包性」を考慮する必要性があることを主張し，「個体概念」の役割の重要性を提案する。第4節では，述語名詞の関係詞化の説明には属性の名詞化としての「種 (kind)」を仮定する必要があり，これには(1)の定先行詞と(2)の不定先行詞の場合とで2種類認める必要があることを論じる。最後の第5節は結論である。そこではbeの「タイプ転換 (type shift)」を提案し，今後の課題について触れる。

2．先行研究—Hawkins (1980)—

本節では，定と不定の述詞関係節の成立要件について，先行研究として Hawkins (1980) の分析を取り上げて，その問題点について論じる。

(4) a．I remembered [the sweet little child [that Harry used to be_]].

b．*I remembered [a sweet little child [that Harry used to be_]].

(a-b: Hawkins (1980: 53))

Hawkinsは述詞関係節を補部ではなく制限節（制限的修飾句）として扱い，その枠の中で上記 (4a)と(4b)の文法性の相違を説明しているが，そのことと本稿での以下の議論は直接的には関係ない。Hawkinsによると，述詞関係節では関係節の主語名詞句と先行詞名詞句との間に「指示の同一性」が存在しなければならないとする。したがって，(4a)ではHarryとsweet little childとの間に指示の同一性が認められて両者は「同一の，唯一的な個体」となるので，Harryが指示する個体の数よりも多くのsweet little childrenは存在し得ないことになる。その結果，(4a)で定冠詞theが要請されて（確定記述 (definite description) 名詞句の「包括性 (inclusiveness)」による），一方の 不定冠詞 a とは両立せず（したがって，(4b)は非文），(4a)の文法性が説明されるとする。

一般に，個体と，その個体が持つ属性の集合とは一対一に対応するのであるから，述詞が関係詞化された述詞関係節においても関係節主語の個体と先行詞名詞句が表す属性の集合とは一対一に対応する。この点で，(4a)(4b)に対するHawkinsの説明は（先行詞のsweet little childが表す属性の集合の「全体 (totality)」を考慮する点で）正しいと言える。また，Kuno (1970: 353) でも，述詞の関係詞化では先行詞は常に定的 ('the') であるとしている。

では，なぜ(2)は文法的なのであろうか。上で触れた確定記述名詞句の包括性の原理は，不確定記述名詞句の排他性 (exclusiveness) とともにどのみち必要な一般性の高い原理である。本稿では，先述した「個体と，その個体が持つ属性の集合との一対一対応」の考え方を受け入れつつ，（定名詞句の場合をも含め）不定冠詞の生起可能性を説明したい。具体的には，この「対応」関係が守られないのは不定名詞句がどのような文脈（述語）で用いられた場合かについて考える必要がある。この視点が考慮されていない点で，Hawkins (1980) の分析は不備であると言える。

3．不定述詞関係節構文の分布

3．1．内包的述語と内包的文脈

定先行詞名詞句との分布上の違いについては4.2節で明らかとなるので，本節では，不定先行詞名詞句の可能性を内包性 (intensionality) の観点から考える。問題の名詞句は，（原則）「内包的文脈 (intensional context)」に生じる。内包的文脈とは，(11)（おそらく(12)も）の内包的述語によって作り出される文脈である。一方，buy や kiss のような外延的述語（beも外延的述語（他動詞）とされる）によって生み出される文脈を「外延的文脈 (extensional context)」と呼ぶ。外延的他動詞は，個体（eタイプ）と個体の間の「関係 (relation)」を表す。一方，内包的他動詞は，（可能世界を無視すると）個体と一般量化子 (generalized quantifier) の間の「関係」を表す。[3] また，一般量化子としての名詞句に対する意味タイプは<<e, t>, t>である。[4]

次に，内包的述語と外延的述語の判別について見ておく ((5)−(6)の例は白井 (1985: 139) より)。一般に，内包的述語と外延的述語では，以下のような意味論的相違

がある。(5)の外延的述語（自動詞）runでは，(5a)（5b）は(5c）を論理的に含意（entail）するが，(6)の内包的述語（自動詞）riseの場合は，(6a)（6b）は（6c）を論理的に含意しない。これは，riseのような内包的述語の場合には，runのような外延的述語とは意味論的に異なり，単に，その時点における個体定項の値（外延）を考えるだけでは十分ではないため，(6)の推論は成り立たないからである。(6)では，現在の状況以外をも見ないと真偽が決まらない。すなわち，内包的には，the temperatureとninetyの意義（sense）は同じではない，あるいは，違うものを指示している，ということである。一方の(5)では，意義は関連しない。The mayorとJohnの外延的な指示（reference）のみが関連し，ここでは両者は指示的には同一の個体を表している（cf. (5a)）。

(5) a．The mayor is John.
　b．The mayor is running.
　c．John is running.

(6) a．The temperature is ninety.
　b．The temperature is rising.
　c．Ninety is rising.

(7)のseekは典型的な内包的述語（他動詞）であり，意味論的には(6)の内包的述語riseと同様の理由から(7a)(7b)は(7c)を論理的に含意しない結果となる。Seekと同義語のsearch for（='try to find'）も同様に内包的述語である。同様の議論は(8)のresembleについても成り立つので，本稿ではresembleを内包的述語と措定する。

(7) a．The morning star is Venus.
　b．I seek the morning star.
　c．I seek Venus.

(8) a．The morning star is Venus.
　b．That star in the sky resembles the morning star.
　c．That star in the sky resembles Venus.

Hawkins（1980）の例(4)のrememberは判断が難しい述語である。まず，この動詞は特定の個体の存在を前提にできる述語である。たとえば，(9)では，Joは特定の個体を指示し，それを代名詞sheが指している。

(9)　Do you remember Jo? She was in our class.

(10) a．The student council president is Jo.
　b．Do you remember the student council president? She is in Tom's class.
　c．Do you remember Jo? She is in Tom's class.

(10)では，その時点における個体定項の値（外延）を考えるだけで十分であり，したがって，(10a)(10b)は（10c）を論理的に含意すると言える。(10)では意義は関連しない。The student council presidentとJoの外延的な指示のみが関連し，ここでは両者は指示的には同一の個体を表していると解釈できる。したがって，rememberは外延的述語と考えてよい。

以上から，(2)のsearch forは内包的他動詞と言え，それと問題の不定名詞句が共起するような文脈（内包的文脈）が必要であることが明らかとなった。実際，(3)では，(2)と同じ形式の名詞句が今度は外延的他動詞 kiss とともに用いられ，非文となっている。((4b)がなぜ非文法的となるのかに関しては4.2節参照。)

(11)に内包的他動詞の（部分的な）リストを示す。(12)は本稿のデータに登場する（内包的に用いられ得る）述語をリストアップしたものである（ただし，筆者の考えに基づくもので議論の余地あり）。

(11)　seek, need, think of, understand, know, realize, find（分かる）, ...

(12)　search for, look for, resemble, try to, refer to, find（見つけ出す）

3．2．先行詞名詞句の不定性と「個体概念」の並置の読み

3.1節において，不定名詞句自体は内包的文脈に生じることに触れたが，本節では，同じ不定名詞句が内包上の「並置」の文脈を必要とする場合があることと不定先行詞 a N との関連性について，定先行詞述詞関係節とも比較しつつ考える。

(13)では，動詞resembleは3.1節で見たように内包的他動詞として用いられている。

(13)　He resembles more [a Manchester solicitor [which he is_]] than [a world record holder [which he also is_]].　(Scheurweghs (1959: 278))

(13)はX *resembles more* Y *than* Zの形式をしており，X（he）は名詞句Y，Zに含まれるheと同一の個体を指示する。2節で述べたように，一般に，個体と，その個体が持つ属性の集合とは一対一に対応するのであるから，述詞関係節においても主語の個体と先行詞名詞句が表す属性の集合とは一対一に対応する。したがって，仮に，同一の個体（he）に関して，それが持つ2種類の「属性の集合」('Manchester solicitor which he is'と'world record holder which he also is'）の外延どうしの並置がなされているとすると，（同一の個体heとその属性の集合の「全体」との）一対一対応を破ることになり，結果として不自然な読みとなることが予測される。Manchester solicitorsの集合の中には個体heが含まれている。World record holdersの集合の中にも同一の個

体heが含まれる。したがって，たとえば，Manchester solicitorsの外延に基づいてa Manchester solicitor which he isの外延heを一義的に決定することはできない。このheはもう一方のa world record holder which he also isの外延heでもあるからである。同じことはworld record holdersの外延とa world record holder which he also isの外延との間に関しても言える。⒀の自然な読みは，Y，Zの指示する属性の内包を考慮に入れ，Y，Zの指示物が内包的には異なると考えることによって説明できる。可能世界が異なれば個々の状況下でY，Zそれぞれは別々の内包（個体概念）を表し得るのであるから，⒀では内包的に異なるY，Zと個体X（he）との類似性が述べられていると考えるわけである。⒀に見られるような異なる内包（個体概念）の「並置」は，先行詞名詞句が不定である（不定でなければならない）ことと整合する。

⒀のような異なる個体概念の並置は，先行詞名詞句の不定性と整合し，したがって，どのみち必要なHawkinsの不確定記述名詞句の「排他性（exclusiveness）」が予測するところとも何ら矛盾しない。以上，述詞関係節の先行詞名詞句が不定であれば他にも個体概念が存在してよいことが帰結すると考えることにより，内包的文脈における不定名詞句［a N+PRC］の生起可能性を説明した。

次に，定先行詞名詞句の場合と比べてみよう。まず，述詞（すなわち個体の属性（＝外延的には個体の集合））と結合する外延的述語 be が，不定先行詞述詞関係節とともに用いられると，⒁にあるように非文となってしまう。

⒁?*He is more [a Manchester solicitor [which he is_]] than [a world record holder [which he also is_]].

この事実から，不定先行詞名詞句はbe__の述詞の位置には生じにくいことが分かる。このことから，問題の不定名詞句は(1)の定先行詞述詞関係節とは相補分布的であるようにも思われるが，⒀のaをtheに変えても文法的であることから，定先行詞名詞句は述詞として内包的文脈にも生じ得ることが明らかである。Theの場合は上述の「1対1の対応」が保持されるので（これが無標であろう），(1)のように述詞として外延的述語beとも生じ得るし，さらに⒀の内包的述語とも共起できるのは，もしも（述詞が表す）「属性」も内包的存在体とみなし得るのであるならば，当然の帰結である。

それでは，aの場合は問題の1対1の対応関係が保持されないにもかかわらず，なぜ（13）は文法的なのであろうか。次節では，個体概念を属性の名詞化の観点から考えることによって，定・不定名詞句の分布上の違いを説明してみたい。

4．属性の名詞化としての個体と「個体概念」

4．1．属性の名詞化と内包性

3.2節では，⒀に関して個体概念を考慮に入れる必要性について論じた。本節では，まず，属性の名詞化に2種類の区別を導入する。以下の例を見てみよう。

⒂a．*Maxwell is [a doctor [that his father once used to be_]].
　b．Maxwell is [the doctor [that his father once used to be_]]. (cf. (1))

⒃a．Maxwell is an intern trying to be [a doctor [that his father once used to be_]].
　b．Maxwell is an intern trying to be [the doctor [that his father once used to be_]].

述詞関係節を含んだ不定名詞句は，(15a)にあるように，外延的他動詞beの述詞としては不可であることについてはすでに触れた。⒃の'try to (be)'は，次の（17a）(17b)が(17c)を論理的に含意しないことから，複合的に内包的述語として機能している。

⒄a．The most prominent contemporary linguist is Chomsky.
　b．I try to be the most prominent contemporary linguist.
　c．I try to be Chomsky.

したがって，(16a)にある通り，問題の不定名詞句はtry to beの後ろで予測通り可能である。一方，(16b)の定先行詞の述詞関係節も同じ環境で可能である。この点については，本稿では次のように考える。一般にある表現の内包は外延より「意味論的に」強力である。文の内包，すなわちすべての可能世界でその文がとり得る真理値が与えられれば，特定の可能世界における外延は決まるが，逆は成り立たない。したがって，⒃の内包的文脈には個体概念を表す当該の不定名詞句のみならず（(16a)），典型的に外延的他動詞beとともに生じる定先行詞の述詞関係節も（try to (be) のもとで）生じられる（(16b)）のである。（前節でも触れたように，もしも述詞が表す「属性」を内包的な存在体とみなすことができるのであれば，(16b)はそのことの帰結と考えることも可能である。）

3.1節で見たように，述詞関係節を含んだ不定名詞句自体が生起可能であるためには，基本的に内包的文脈が必要であるが，一方で同じ名詞句が kiss（個体と結合）

やbe（個体の集合（＝属性）と結合）とは共起不可能であるのは，述詞関係節を含んだ定先行詞名詞句がbeと共起できる事実を考慮すると，不定先行詞名詞句の不定性（indefiniteness）が個体や属性を指示できないという性質を内在的に持っているからと考えられる。したがって，問題の不定名詞句は（単純な不定名詞句と異なり）個体概念しか表せないのである。そこで，仮定1を立てる。

［仮定1］ 述詞の関係詞化は，述詞の表す属性の「名詞化」である。[5] これには名詞化した存在体として，①(a)（sub)kindとしての個体と，①(b) kindのメンバーの集合としてDP（a N）で実現する一般量化子を認め，①(b)にはその②個体概念を措定する。

①(a)では，個体とその属性の集合との間の「一対一の対応」は保持されるとする。(Sub)kindはそれ自体が個体概念として「唯一のもの（uniqueness）」を表すと考えられる（個体化しても述語的であり，項的でない可能性については4.2節参照）。Chierchia（1998: 348ff.）によると，kindは内包的な個体（intensional individual）であると言え，たとえば，'dog-kind'はあらゆる可能世界におけるすべてのdogsの「全体」（totality）から成る個体概念と考えることができるとしている。①(a)の個体はChierchiaのkindと基本的に同じものと仮定する（Chierchiaの'NOM'演算子（＝内包的なイオタ）（Chierchia（1998: 351, fn. 10））参照）。

①(b)の一般量化子(DP)に関しては，名前（name）（eタイプ）の個体概念（個体(e)の内包タイプ（<s, e>））と同様に，属性が名詞化したkindのメンバー（の集合）から形成された単一集合（singleton set）に個体概念を仮定する。[a N] はその個体概念を指示対象とする（非特定的な）一般量化子（<<s, <<s, e>, t>>, t>）である。個体と，その個体の持つ属性の集合とは一対一に対応するのであるから，その属性の「全体」(kindと同様唯一のものである）に対して，そのメンバーである個体概念の任意の一つを指示するのに量化子aを伴うのである。以上の点について次の⒅を見てみよう。

⒅ We refer to (69) [='Griswold is a cook'] as a predicational sentence. In it, a cook does not *refer to* [a particular cook [that Griswold is [$t_{<<s,e>,t>}$]]; ...

（R. Fiengo and R. May (1994), *Indices and Identity*, 30地の文）

まず，この'refer to'は内包的述語として用いられている。たとえば，'X refers to a unicorn'は，現実にunicornが存在しなくても真となり得る。現在という時点におけるunicornの外延（実際には存在しない）を考えるだけでは不十分で，unicornの内包を考える必要がある。⒅では，述詞関係節を含んだ不定名詞句の先行詞に'particular'が付いている。[6] 名詞句の解釈は「Griswoldが就いているcook-kindのうちの特定のメンバーが表す（任意の）1つの個体概念（の単一集合）」（を指す）となる。Griswoldを外延とした場合，その内包として，特定のcookの任意の個体概念を不定名詞句全体が表しているのである。このkindのメンバーの集合を，単なる個体cookの集合と混同してはならない。前者は，Griswoldの持つ属性が名詞化したkindに属するメンバー（個体概念のcook）から成る集合である。⒅の例は，kindのメンバーに基づく[$_{DP}$ a N]の個体概念は述語的ではなく，むしろ項的であることを示唆するものと考えられる。

ここで，[$_{DP}$ a N]が「項的である」という点について注意しておきたい。⒅の関係節の関係詞の選択について筆者のインフォーマント2名（A，Bとする）によると，A，Bとも⒅のthatの代わりにwhoは不可とした。[7] Thatの代わりにwhoは基本的に容認不可である事実は，これらの関係節はいずれも同一性（identity）のコピュラ文（e.g., 'Clark Kent is Superman.'）あるいは同定（identification）のコピュラ文（e.g., 'That is John.'）の関係詞化ではないことを示唆している。なぜならば，これら2つのコピュラ文ではbeの後ろには指示的な名詞句（したがって，通常の個体（eタイプ））が生じるので，もしも⒅の関係節が同一文あるいは同定文の関係詞化であるならば，whoが可能である（したがって，空所は「述詞」でなく個体変項xである）はずだからである。たとえば，'It turned out that he wasn't the person$_i$ [who$_i$ I'd thought he was $__{}_i$]'（Huddleston and Pullum (2002: 1048)）は同定文の関係詞化の例であり，関係詞はwhoが用いられている。以上から，⒅の関係節は（非指示的な）「述詞」（を含む叙述文（predicational sentence））の関係詞化であり，先行詞名詞句 [$_{DP}$ a N] は（述語的でなく）項的ではあっても，原則whoが不可であることから，上述のkindのメンバーに由来する個体概念としての[$_{DP}$ a N]は通常の個体とは異なる性質のものである。そこで，⒅の関節節の空所に個体概念の<s, e>にもとづく<<s, e>, t>を仮定する。

本節の以上の議論から，①(b)の一般量化子[$_{DP}$ a N]は，kindのメンバーの集合（の「全体」（最大値））と関係節主語との間での属性の「一対一対応」が守られない事態を回避するため，kindのメンバーの1つを，内

包的な個体概念[8]を指示対象とする（内包的文脈に生じ得る）ように切り替えるという意味的な「最後の手段(last resort)」に訴えることにより可能となったと主張する。

4．2．'Some/many/one+N' vs. 'a+N'

本節では，まず，①(a)の個体（(sub)kind）を主要部とする述詞関係節を含む名詞句が「不定的」に用いられた例について考える。

［仮定2］①(a)の個体（(sub)kind）に由来する［some/many/one+N］の不定名詞句は［a+N］と異なり，述語的である。

まず，(19)－(22)では，述詞関係節を含んだ名詞句は限定詞aを伴う不定先行詞名詞句と異なり，(22)のthere構文の例を除き）いずれもbeの述詞となっている（関係節は省略できない点にも注意）。

(19)…she was concentrating on being everything *(that a secretary to the headmistress of a famous girls' school should be).

(20)…I have relatives who are drunkards and adulterers and many things *(that I am not).

((19)－(20)：梶田（1990: 64））

(21) It seemed as though their rule was that everything should pretend to be something *(that it was not).

(Scheurweghs (1959: 281))

(22) If there was one thing *(her school was not), it was dull.　（梶田（1990: 63））

まず，これらの名詞句の主要部がすべて-thing(s)である点に注意されたい。この-thingは「属性を示す代用形」(cf. 梶田（1990: 63))で，Partee (1987: 132) の属性名詞（attribute noun）の一種である。これらの名詞類は，その外延が再び属性であるという性質を持ち，他にcolor，age，sizeなどが含まれる。例えば，colorはその外延として属性を表すred，black，blueなどの述語を持ち，[9]これらの名詞類はeveryにより量化されてbeの述詞として生じ得るのである。この点で普通名詞（たとえばstudent）とは異なる（cf. This house has been [every color]. (cf. Partee (1987: 132) vs. *John has been [every student].)。(19)－(22)では，先行詞名詞句の主要部-thing(s)はその属性が名詞化した①(a)の（kindの）個体概念を表していると考えられ，したがって，定先行詞名詞句（=(1)）と同様に述語的であることを示唆している。(22)のthere構文では，thingによって示される不特定の属性がそれ自体，一個の存在として扱われている（cf. 梶田（1990: 63））ことが明白である。これらの事実は，述詞関係節では関係詞化により属性が名詞化して個体として扱われていることを明らかに示している。特に(22)ではそれが一層明白である。

また，次の(23)にあるように，ある種の量化子に後続するNはsubkindの読みを持つとされる。述語は種レベルの述語（kind-level predicate）の'live'であり，量化子mostは（個体としてのinsectではなく）その'kind'を量化している。

(23) Most insects live on average 10 months.

(Zamparelli (2000: 66))

(24) a．Maxwell has been most *(kinds of) doctors that his father once used to be.

b．John is most things #(that a woman looks for in a husband).　(b: Grosu (2000: 146))

筆者の調査によると，(24a)では，先行詞名詞がkind ofを必要とすることから明らかなように，mostはdoctorの'kind'を量化していると考えられる。したがって，(24b)でmostにより量化されているthingsは，属性の代用形としての-thingが'kind'を表していることを示唆していると言える。上述したように，-thingなどの属性名詞はその外延が再び属性を表すので，(24b)ではmostはkindとしての-thingsの「外延」を量化していることになる。同様に，(19)－(22)でも，everyおよびsome/many/oneはkindとしての-thing(s)の「外延」を量化していると言える。したがって，関係詞化によって名詞化した-thing(s)は量化されてはいるが，（限定詞がtheやeveryでなくとも）kindとして「一対一の対応」を保持しているのである。その外延の全体集合に対してその「ほとんど」「多く」「いくつか」「ひとつ（one)」を定めているのである。

それでは，①(b)の述詞関係節の不定先行詞の[a N]は，上述の(19)－(22)のmany/some/one付きの不定先行詞名詞句と（もしあるとして）どのような違いがあるのであろうか。本稿では，以下のように仮定する。4.1節で述べた属性（<e, t>）の名詞化した①(b)のkindのメンバー（の集合）では，その単一集合の「メンバー」（外延的には<<e, t>, t>）は，集合論的には，関係節の空所の述詞（<<s, e>, t>）が表す「個体概念の集合」のもう1つ上の集合（<<s, <<s, e>, t>>, t>）を表すもので，それをDPの[a N]と仮定する。このように考えると，先行詞のDP全体が空所の述詞［$_{Pred}$ a N］（ここでは，述詞を便宜的に［$_{Pred}$ a N］と表記しているに過ぎない）に対応しているために（たとえばsome/many/one+Nでなく）

[a N] とならなければならないことが説明される。したがって，空所の述詞 [$_{Pred}$ a N] の<<s, e>, t>タイプと先行詞 [$_{DP}$ a N] の<<s, <<s, e>, t>>, t>タイプとは，集合論的に「全体集合」（先行詞）と「部分集合」（空所の述詞）の関係を形成すると考える。[10] 先行詞の [a N] の内包，すなわち個体概念に対する外延は関係節主語の個体である。'a thin man [that Harry once used to be [$t_{<<s, e>, t>}$]]' では，名詞句全体が内包（個体概念）を表し，その外延が個体Harry（現在はfat man）である。

上で，①(a)では（sub)kindはそれ自体が個体概念として「唯一のもの（uniqueness)」を表すと考えられるとした。Chierchia (1985: 436, fn.19) は，命題関数に（少なくとも）2種類を認め，そのうちの普通名詞（=述語）の意味値（semantic value）としての命題関数は'kind'を個体的相関物として持ち，もう一方の動詞句（VP)(=述語）の意味値としての命題関数は'state/action'（一種のイベント構造（eventuality）と考えられる）を相関物として持つとしている。[11] その上で，意味的にはbeを前者の命題関数（e.g. gold, men）から後者の命題関数（e.g. be gold, be man）へ写像する関数と解釈する可能性を示唆している。以上を踏まえ，本稿では，be以外にもある種の述語や法助動詞が作り出す文脈（admire __や__must/may/could Vなど）においても，意味的に同様の写像が行われて，述語的な（非指示的）名詞句が形成されると仮定する。これに対して，4.1節で見たように，①（b）の一般量化子（[$_{DP}$ a N]）は述語的ではなく項的である。

次に，「指示性（referentiality)」，「特定性（specificity)」に関しては，以下のように仮定する（これらに関してはKuno (1970) も参照)。

[仮定3] ①(a)の個体（属性の名詞化）はkindの性質を持つが，これに由来する（述詞関係節を含んだ複合的な述詞の名詞句の場合も含めた）述詞は，特定の文脈において「述語的」で，したがって，「非指示的」である。①(b)の一般量化子の [a N] は，内包的文脈において「非特定的」であるが，個体定項の値（外延）を指示する点では「指示的」である。

①(a)の個体は通常の個体（eタイプ）とは異なり，kind（元は属性）の性質を持つと考え，属性自身が指示される（cf. Chierchia (1984)）。したがって，この意味では①(a)の個体は指示的と言える。しかし，上述のように，ある特定の文脈でkindからstate/actionへ写像されて述語的となり，したがって，指示機能を失って非指示的となると考える。例えば，外延的述語beは，周知のとおり，典型的に非指示的表現（述詞）を従える（しかし，たとえばmeetは指示的表現を取る（e.g. I am not the man that John became. vs. *I met the man that John had become.))。

一方，内包的述語は，非特定的（「どれでもよい」という解釈）である不定名詞句を要求する。このような名詞句は，kindのメンバーの個体概念を指示対象とする（基本的にwhoは不可（4.1節））ことでこの個体概念を通じて個体定項（の集合）の値（外延）を指示する点で指示的と言えるのである。

本稿の定/不定述詞関係節の生起可能性は，[仮定1]～[仮定3]による以下の仮説の帰結となる。

[仮説] 述詞関係節を含んだ不定名詞句は，（単純な不定名詞句と異なり）個体概念のみを指示対象とする非特定的でかつ指示的な名詞句であり，内包的文脈を必要とする。一方，定述詞関係節およびevery/many/some/one付きの先行詞に導かれる関係節は外延的/内包的文脈に反応するのではなく，（state/actionというイベント構造に関わる）述語的性質を持ち，したがって，非指示的な名詞句を取れる文脈を必要とする。

(25)が示すように，admire __，__ must/may/could Vなどの文脈に問題の定述詞関係節が生じ得ることは上記の仮説の帰結となる。これらの文脈には，be__同様，述語的な定述詞関係節が生起できるのである。次に，rememberに関しても（3.1節で論じたように，この述語は外延的他動詞である），be同様（しかし，同じく外延的述語のmeetとは異なり），定述詞関係節が生起可能である事実(4a)が説明される。同時に，rememberは外延的述語であるので，不定述詞関係節が生起不可である事実(4b)も導かれる。重要なことに，これらの文脈に不定述詞関係節が生じないのは，先述したように，この不定先行詞名詞句は述語的でなく，項的だからである。

(25) a. I very much admire the/*a man that he has become.
b. The/*A dramatist that you are must see how striking such a scene would be just at that moment. （梶田 (1990: 64) を改変）

以上から，不定述詞関係節は個体概念を表し，内包的文脈に生じると結論づけることができる。

5．結論："Be" のタイプ転換の提案と今後の課題

本節では，不定先行詞の述詞関係節の命題（叙述文）としての解釈と属性（内包）を対象とする解釈の二面性を説明するために，beのタイプ転換の操作を提案する。

まず，筆者の調査によると，(26)にあるように，典型的な一般量化子としての名詞句 every N（<<e, t>, t>）と不定名詞句［$_{DP}$ a N＋PRC］との等位接続が可能である。内包的他動詞search forの目的語（項）として生じる［$_{DP}$ a N＋PRC］の主要部は，その意味タイプが<<e, t>, t>（属性の集合）であるので一般量化子としての名詞句（DP）との等位接続が可能となったと考えると，(26)の事実はその帰結として説明される。

(26) Harry is basically a fat man searching both for [$_{DP}$ a thin man that he once used to be] and for [$_{DP}$ everything that you could look for in a thin man].

しかし，ここで1つ問題が生じる。Beの空所は述詞なので，本来，この空所は述詞の意味タイプ<e, t>でなければならない。特定の現実の世界（状況）においてHarry once used to be [a thin man]は真である。したがって，（意味解釈のある段階で）空所を<e, t>と解釈（通常の叙述文）することが必要である。しかし，同時に[a N+PRC]の名詞句全体は内包を表し，先行詞の[a N]の部分が主要部として一般量化子の名詞句全体がもっている性質を決めているのであるから，空所が<e, t>のままでは先行詞との意味の「合成」ができない。本稿では，この事態は外延的述語beと内包的述語search forとの間のミスマッチに起因すると考え，（叙述文の意味解釈の後の段階で）beを「タイプ転換（type shift）」（cf. Partee（1987））することを提案する。主節の内包的述語search forに合わせてbeを内包的述語にタイプを変更し，beが内包的表現（ここは(13)の事実により個体概念）と結合することが可能となって空所には<<s, e>, t>が仮定される。したがって，関係節は<<s, <<s, e>, t>>, t>となる。以上が正しいとすると，この関係節は個体概念の集合（(26)の事実により一般量化子のDPの指示対象（可能世界を考慮に入れた内包の意味タイプとしては<<s, <<s, e>, t>>, t>）を表す先行詞と意味的に合成することができるようになる。この個体概念（の集合）は4.1節の①(b)の属性の名詞化に基づくものである。このようなタイプの転換により，問題のミスマッチが解消される。空所の要素が<<s, <<s, e>, t>>, t>にタイプ転換した後は，この要素は「属性の集合（の内包）」を表すのであるから，それぞれの可能世界に対して，個体概念 ∧thin manの集合を与える関数とみなすことができる。以上の議論から，(2)は(27)のような構造を持つと仮定する。なお，限定詞の構造については稿を改める（河野(2012) 参照)。

(27) Harry is basically a fat man *searching for* [$_{DP}$ [$_{DP}$ a thin man] [$_{CP}$ that he once used to be [$t_{<<s, e>, t>}$]]].

以上の“be”のタイプ転換は，定先行詞の述詞関係節の場合には見られない操作である。すでに見たとおり，不定述詞関係節では，空所の意味タイプを内包のタイプに変更し，関係節自体は<<s, <<s, e>, t>>, t>となるので先行詞名詞句と関係節との交差の解釈が可能となる。したがって，不定述詞関係節は制限節である。このように，不定述詞関係節の空所を(27)のように考えると，内包的他動詞search forの目的語項として不定先行詞の述詞関係節が可能となることが説明される。長原（1990）では述詞関係節は補部であると考えているが，もしも両者が同じ補部の関係節であるならば，なぜタイプ転換操作の有無に関して上述の相違が生じるのであろうか。紙幅の都合により，この問題については稿を改めたい。

注

＊本稿は，2016（平成28）年度の筆者の国内研究（所属機関：東京学芸大学人文社会科学系，研究テーマ：補部として機能する英語の関係節の共時的研究）における研究成果の一部である。また，同研究の別の一部は，日本言語学会第153回大会（2016年12月3日，福岡大学）において「英語の述詞関係節の意味機能について－不定先行詞の場合－」と題して口頭発表済みであり，本稿の研究はそれに対する加筆・修正を一部含むものである。筆者が国内研究員として所属した東京学芸大学人文社会科学系の河野継代教授には，上記研究成果を草稿の段階から丁寧に目を通していただき，多くの有益なコメントを頂戴した。この場を借りて氏には深く感謝申し上げたい。最後に，インフォーマントをお願いした筆者の勤務先のRobert Sigley, Gabriel A. Lee, Jeffrey Johnson，北林光（英語母語話者）の各氏にはこの場を借りてお礼を申し上げる。

1）言うまでもないが，関係節が補部の機能を果たしていることを主張するためには，補部の必要条件として主要部名詞にその関係節によって埋められるべき「意味的空所」があることを論証する必要がある。この点に関する詳しい議論は長原（1990）を参照されたい。

2）本稿では，意味タイプの一致も空所に課される「同一性」の条件の一部として含まれると仮定する。

3）用語の混乱を避けるためにここで注意をしておきたい。Milsark（1977: 8）では，限定詞を2つの系列に分けている。筆者なりに追加，簡略化して以下に示す。(ia)

はthere構文に生じ得る名詞句を形成できる限定詞であるが，(ib) はそれが不可能な限定詞である。

(i)a．弱限定詞（基数性述語的語（cardinality word））：a, numeral, many, some (sm), ϕ

b．強限定詞（量化子的語（quantifier word））：the, that/this, every, each, both, most, etc.

本稿では，形式意味論の伝統に従い，普通名詞と結合してできた名詞句に対応した論理表現を一般量化子と呼んでいる。これによれば，4.2節に登場する 'everything'，'most things'，'many things'，'one thing' なども一般量化子となる。したがって，以下の議論では，限定詞（不定冠詞）のaを「基数性述語a」ではなく「量化子a」と呼ぶ。また，本稿では，（当面）述語名詞a Nのaは意味的に「空（empty)」で意味解釈には貢献しないと考えているが，項のa Nは一般量化子でaに作用域を形成する能力を認めている。

4）Partee（1987, 140, fn. 13）によれば，<<e, t>, t>タイプの表現は内包的他動詞によって下位範疇化され得ることが指摘されている。

5）4.2節の(22)では，1つの個体を表す 'one thing'（属性の名詞化）が後半では叙述形容詞 'dull'（同じく属性を表す）で具体的に説明されている点に注意。この事実から，述詞の関係詞化では（空所の要素の）属性が名詞化していることが間接的に知られるのである。

6）この "particular" は特定の個体を選び出しているのではなく，"a particular function of" のような意味として個体概念の「概念」（すなわち「意義（sense)」）の部分を修飾していると考えられるかもしれない。この点については今後の課題とする。

7）Whichの使用に関しては，Aは(18)において可，Bはともに周辺的（'marginal'）には可であると判断した。なお，（定先行詞）述詞関係節では先行詞が「人」であっても関係詞はwhichが用いられるのはなぜかについての説明は，Jespersen (1927: 123-124) が興味深い。

8）しかし，(ib) にあるように，kind (of) とは矛盾しないようである。

(i)a．*Maxwell is a (kind of) doctor that his father once used to be.

b．Maxwell is an intern trying to be a (kind of) doctor that his father once used to be.

この事実から，①(b)のケースとしたa Nに関しては，①(a)の 'kind' としての個体に由来する個体概念を指示対象とする（a *kind of* N）ことが可能なのかもしれない。

9）(22)の 'dull' は，'thing her school was not' 全体の「外延」となって文脈中に生じている例と言える。

10）この「部分集合」と先述のkindの「メンバー」とを混同しないように注意されたい。

11）述詞（述語名詞）にイベント構造（eventuality）を認める必要性については，別に論じたい。

参照文献

Carlson, Gregory N. (1977) Amount relatives. *Language* 53: 520-542.

Chierchia, Gennaro (1984) *Topics in the Syntax and Semantics of Infinitives and Gerunds.* Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst. (New York: Garland Publishing. (1988))

Chierchia, Gennaro (1985) Formal semantics and the grammar of predication. *Linguistic Inqury* 16: 417-443.

Chierchia, Gennaro (1998) Reference to kinds across languages. *Natural Language Semantics* 6: 339-405.

Grosu, Alexzander (2000) Type-resolution in relative constructions: competing restrictive and maximalizing construals. In: Hans Bennis, Martin Everaert and Eric Reuland (eds.) (2000) *Interface Strategies*, 127-152. Amsterdam: Royal Netherlands Academy of Arts and Sciences.

Hawkins, John A. (1980) On surface definite articles in English. In: John van der Auwera (ed.) (1980) *The Semantics of Determiners*, 41-66. London: Croom Helm.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language.* Cambridge: Cambridge University Press.

Jespersen, Otto (1927) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part III, Syntax (Second Volume). London: Allen & Unwin.

梶田優（1990）「範疇，意味，文法関係—述語名詞表現とその「関係詞化」—」池谷彰（編）（1990）『英語の実証的研究にもとづく文法理論の比較研究（平成元年度科学研究費補助金研究成果報告書)』，60-73．東京学芸大学．

河野継代（2012）『英語の関係節』，開拓社叢書21．東京：開拓社．

Kuno, Susumu (1970) Some properties of non-referential noun phrases. In: Roman Jakobson and Shigeo Kawamoto (eds.) (1970) *Studies in General and Oriental Linguistics: Presented to Shiro Hattori on the Occasion of His Sixtieth Birthday.* TEC.

McCawley, James D. (1981) The syntax and semantics of

English relative clauses. *Lingua* 53: 99-149.

Milsark, Gary L. (1977) Toward an explanation of certain peculiarities of the existential construction in English. *Linguistic Analysis* 3:1-29.

長原幸雄 (1990)『関係節』, 新英文法選書第8巻. 東京：大修館書店.

Partee, Barbara (1987) Noun phrase interpretation and type-shifting principles. In: J. Groenendijk and M. Stockhof (eds.) (1987) *Studies in Discourse Representation Theory and the theory of Generalized Quantifiers*, 115-143. Dordrecht: Foris.

Scheurweghs, Gustave (1959) *Present-Day English Syntax: A Survey of Sentence Patterns*. London: Longman.

白井賢一郎 (1985)『形式意味論入門－言語・論理・認知の世界－』東京：産業図書.

渡辺良彦 (2016)「英語の述詞関係節の意味機能について―不定先行詞の場合―」日本言語学会第153回大会口頭発表. 福岡大学, 2016年12月3日.

Zamparelli, Roberto (1995) *Layers in the Determiner Phrase*. Ph.D. dissertation, University of Rochester. (New York: Garland Publishing. (2000))